

# 彙報

二〇一五年四月より  
二〇一六年三月まで

## 研究状況

### 班研究

#### 東方學研究部

##### 人文情報學の基礎研究

班長 クリステイアン・ウイッテルン  
本共同研究班は、文獻研究が行う人文科學の諸分野、特に東方學の研究、つまり古典の校正、解讀、注釋、翻譯等を支援する方法や規格を提唱して、さらにそれに基づいた研究支援ツール見本の實装を目指している。そのツールの具體的な機能等は研究進行と共に明らかになるだろうが、現時点では文字としてのテキストと畫像テキストの連携、複数の版本の扱い、テキスト批判、引用文や逸文の檢出、語彙や實例の檢討、テキストマイニング、テーマ・ジャンルなどでの絞り檢索などが考えられる。研究者の需要を再檢討して、テキスト研究に必要な道具で二一世紀の人文學研究の基盤を強化することは本研究の最大の目的だ。今年度は漢籍リポジトリの公開に向けて準備を進めてきた、秋から約九〇〇種の漢籍が實驗的に公開して、ウエブ (<http://www.kanripjo.org>) と

ンドク (<http://www.mandoku.org>) で使用可能になった。二〇一六年三月一九日に一般公開済み。

四月二八日 第二十七回 現状報告と今年度の計畫

五月二日 第二十八回 新しいサーバーとデータの構築

五月二六日 第二十九回 構築中の漢リポサーバに追加された機能について

六月二三日 第三十回 Windows 用の zip パッケージを更新について

七月一四日 第三十一回 DH2015の参加報告

一〇月一三日 第三十二回 ウエブサイトの新たに構築した GitHub との連携

一〇月二七日 第三十三回 [www.kanripjo.org](http://www.kanripjo.org) の新しい機能紹介

十一月二四日 第三十四回 Windows 用の zip パッケージの更新について

十二月 八日 第三十五回 報告書の檢討(一)

二〇一六年一月二日 第三十六回 報告書第二章「漢籍リポジトリの情報源と編成」の檢討

一月二六日 第三十七回 報告書第三章「漢籍リポジトリの使い方」の檢討

二月 九日 第三十八回 報告書第四章「漢籍リポジトリの使用例」の檢討

東アジア近世の地域をつなぐ關係と媒介者

班長 岩井茂樹

二〇一五年四月から二〇一六年一月の間、課題についての研究報告をおこなう研究會を計一二回開催した。このほか、研究班のサブグループによる「道咸宦海見聞錄」の會讀をおこなった(計一三回)。これは一九世紀に翰林官および地方官僚を歴任した張集馨(一八〇〇年―一八七九年)が遺した自編年譜および日記からなる史料である。會讀にさいしては電子テキストを作成し、その校訂作業を併せておこなっている。

四月 三日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』

四月 一四日 築城與拆城・近世中國通商口岸

四月 二〇日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』

五月 一日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』

五月 二日 日宋貿易を支える信用システム

五月 二五日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』

五月 二六日 清初の推官及びその廢止―重

劉 石吉  
宋 宇航・凌 鵬  
李 怡文  
張集馨著『道咸宦海見聞錄』  
城地 孝・望月直人  
城地 孝・望月直人  
李 怡文  
張集馨著『道咸宦海見聞錄』  
凌 鵬・宋 宇航  
清初の推官及びその廢止―重

- て地方行政職能の再調整を論じる 項 巧鋒
- 六月 八日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 城地 孝・望月直人
- 六月二二日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 宋 宇航・凌 鵬
- 六月二三日 舶主王直功罪考(後編)―胡宗憲の日本招撫計畫 山崎 嶽
- 六月三〇日 第二次日本遠征後の元・麗・日關係外交文書について 山崎 嶽
- 七月 六日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 城地 孝・望月直人
- 九月二〇日 日本の君主號問題からみた天下の秩序 岩井茂樹
- 九月二八日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 宋 宇航・凌 鵬
- 一〇月一三日 嘉靖六年年末の内殿儀禮改定―中國明代における専制君主と政策決定の正當性 岩本眞利繪
- 一〇月二六日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 城地 孝・望月直人
- 十一月 九日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 岩本眞利繪
- 十一月二二日 一七五一年、南部藩漂流商船をめぐる清日間の往復咨文とその和解 岩井茂樹
- 十一月二四日 明代正統末期・景泰期・天順期における内閣の性格 宋 宇航
- 一月三〇日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 宋 宇航・凌 鵬
- 二月 八日 押佃、租穀と商品經濟―清代巴縣農租佃關係の側面について 凌 鵬
- 二月一四日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 城地 孝・望月直人
- 二〇一六年一月二日 保商局の越境―清末雲南・ビルマ邊境における社會變動と國際關係に關する一考察 望月直人
- 一月二六日 清初の六部衙門における漢人官僚の存在形態―雍正初年の科道官奏摺を手掛かりに 小野達哉
- 二月 一日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 城地 孝
- 發表者 同志社大學・非常勤 發表者 望月直人
- 現代中國研究センター 産學連携研究員 凌 鵬
- 二月 九日 共同體理論の意義と中國農村社 會研究 凌 鵬
- 二月一五日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 宋 宇航・小野達哉
- 三月 八日 自由の民「唐人」の適應と戰略 岩井茂樹
- 三月二三日 官は官を庇うか―清代後期における地方官の「上控」をめぐる連絡・交渉 海 丹
- 三月二八日 會讀、張集馨著『道咸宦海見聞錄』 城地 孝・望月直人
- 『文史通義』研究 班長 古勝隆一
- 本年度は四月二二日に最初の研究会を開催して以來、おおむね一ヶ月に二回のペースで『文史通義』の會讀を実施することができた。あらかじめ擔當者を決めて、會の數日前に譯注稿を各班員に配布し、班員が事前に目を通した上で研究会に出席する方法を採用したため、研究会では效率的に議論することができたものと考えられる。本研究班では『文史通義』内篇五卷を譯出することを目的としており、すでに二〇一五年一月一日の研究班において、卷一を譯し終えた。當初豫想していた以上に多様な論點が各班員から提出されたため、必ずしも意見の一致しないところも少なからずのこったが、そういった部分については、議事録を作成し、後日あらためて検討することができるよう記録を保管してある。各回の終了後には、譯注稿の改稿をあらためて提出してもらっており、すでに卷一については原稿を用意しており、現在、『東方學報』に投稿するため、原稿整理の段階にある。
- 四月二二日 『文史通義』譯注に關する趣旨 說明 古勝隆一
- 五月一九日 『文史通義』卷一「易教上」譯 注 古勝隆一

六月二日 『文史通義』卷二「易教中」 譯 古勝隆一

注 『文史通義』卷二「易教下」 譯 古勝隆一

六月二日 『文史通義』卷二「易教中」 譯 古勝隆一

注 『文史通義』卷二「易教下」 譯 古勝隆一

七月四日 『文史通義』卷二「書教上」 譯 福谷 彬

注 『文史通義』卷二「書教中」 譯 中原佑真

七月二日 『文史通義』卷二「書教中」 譯 中原佑真

注 『文史通義』卷二「書教下」 譯 内山直樹

九月一日 『文史通義』卷二「書教下」 譯 内山直樹

注 『文史通義』卷二「詩教下」 譯 竹元規人

九月二日 『文史通義』卷二「詩教下」 譯 竹元規人

注 『文史通義』卷二「詩教上」 譯 道坂昭廣

一〇月六日 『文史通義』卷二「詩教上」 譯 道坂昭廣

注 『文史通義』卷二「經解上」 譯 渡邊 大

一〇月二〇日 『文史通義』卷二「經解上」 譯 渡邊 大

注 『文史通義』卷二「經解中」 譯 土口史記

十一月七日 『文史通義』卷二「經解中」 譯 土口史記

注 『文史通義』卷二「經解下」 譯 廖 明飛

十二月一日 『文史通義』卷二「經解下」 譯 廖 明飛

注 『文史通義』卷二「原道上」 譯 岩井茂樹

十二月五日 『文史通義』卷二「原道上」 譯 岩井茂樹

注 『文史通義』卷二「原道中」 譯 永田知之

二〇一六年一月一九日 『文史通義』卷二「原道中」 譯 永田知之

注 『文史通義』卷二「原道下」 譯 白石將人

二月二日 『文史通義』卷二「原道下」 譯 白石將人

注 『文史通義』卷二「原道下」 譯 山口智弘

二月六日 『文史通義』卷二「原道下」 譯 山口智弘

注 『文史通義』卷二「原道下」 譯 山口智弘

近現代中國における社會經濟制度の再編

班長 村上 衛

本年度は三年間行われてきたB班をC班として一年延長するかたちとなり、實質的に四年目の最終年度にあたる。そのため、前半は研究の總括を意識した報告を中心に、後半は若手の今後の研究を見据えた報告を中心として合計一五回の研究會を行った。毎回の参加者数は二十数名である。本研究班は時代的・テーマ的に廣い範圍を扱うため、中國近現代史研究者のみならず、明清史研究者や現代中國研究者、また人文科學系だけではなく、社會科學系の經濟史研究者に参加していただいている。特に本年度は日本經濟史を専門とするコメントーターを招聘することにより、中國經濟のあり方および中國經濟史研究の特性についての理解を深めることができた。いずれの報告に關しても活發に討論が行われ、報告・討論の時間を合わせて實質的に三時間を超過することも多かった。なお、本研究班の報告書は現在編集を進めており、來年度前半に刊行豫定である。

\* 括弧内はコメンテーター

四月二四日 開港期朝鮮の國際貿易と華商の活動―論點の整理

石川亮太 (岡本隆司)

五月二四日 「東亞病夫」と近現代中國

高嶋 航 (石川禎浩)

五月二九日 昭市納租―清代巴縣地方の田租

「減免」慣習について

凌 鵬 (岩井茂樹)

六月二四日 新中國建國前後の印刷・造紙業

界について―初期の北京新華印刷廠(一九四九―一九五二年)を中心

楊 韜 (村井寛志)

六月二六日 汎太平洋學術會議にみる科學の

制度化と國際化―中國の加入問題を中心

武上眞理子 (塚原東吾)

一〇月 九日 臺灣の國連脱退と沖繩―臺灣開

海底ケーブル布設問題

貴志俊彦 (清水 麗)

一〇月二三日 香港貿易の數量化と可視化―清

末英字新聞と海關統計の總合的利用

木越義則 (宮田敏之)

十一月二三日 近代中國における紡織技術者養成

富澤芳亞 (澤井 實)

十一月二〇日 日本統治期における臺灣人の移

動―一八九五年から一九三七年まで中國大陸に留學する臺灣人

巫 靚 (上田貴子)

十二月一日 滿洲開拓基督教村の一考察

濱田直也 (細谷 亨)

二〇一六年一月一日 上海租界二重國籍中國人問題―

會審公廨と上海總商會を中心に

郭まいか (中山大將)

- 一月二九日 個人の病氣か民族の病氣か―近代中國における肺結核病の醫療社會史 瞿 艷丹(市川智生)
- 二月二二日 明代後期閩南における開港と海寇 山崎 嶽(岡本隆司)
- 二月二六日 一九二〇年代廣東の族刊雜誌と宗族 宮内 肇(陳 來幸)
- 東アジア古典文獻コーパスの應用研究 班長 安岡孝一
- 「十八史略」をもとにした漢文コーパスを作成し、さらにこの漢文コーパスを用いた形態素解析の結果を、人名情報の抽出という側面から検討した。人名情報のうち姓氏については、形態素辭書への大量追加という手法が有効だと感觸を得た。一方、名については、他の用例とのバッティングが「ストーリー」全體で回避されていることが判明し、「ストーリー」分析をおこなう必要性があるということまでは推定できたが、自動抽出の實用化には至らなかった。
- 四月一〇日 姓氏と名、『固有表現抽出におけるエラー分析』
- 五月 八日 姓氏と名
- 五月二二日 星と樹の意味素性、品詞分類(2015.5.22版)作成
- 六月 五日 姓氏と名、『單語の分散表現と構成性の計算モデルの發展』
- 六月一九日 word2vec
- 七月 三日 『十八史略』 word2vec と word2phrase
- 七月一七日 品詞分類(2015.5.22版)における「世」「氣」「理」「道」
- 九月一四日 「螢」と「蠓」と「三才圖會」
- 九月二五日 『正字通』、『說文解字注』データ、『三才圖會』
- 一〇月 九日 『倭漢三才圖會』、古代漢語語料庫
- 一〇月二三日 科學研究費計畫調書チェック
- 十一月 六日 姓氏と名
- 十一月二七日 氏名追加 Meigs 辭書
- 十二月一日 地名を含む官職についての再検討、人名についての再検討
- 二〇一六年一月八日 最終報告書ケラ稿
- 一月二九日 最終報告書完成
- 三月一八日 「東洋學へのコンピュータ利用」第二七回研究セミナーにて成果發表
- 清華大學藏戰國竹書を讀む―中國古代の基礎史料 班長 淺原達郎
- 引き続き『清華大學藏戰國竹簡』第二冊の繫年を讀んでいる。讀みかけの第八章から始めて、最終章第二十三章を讀んでいるところである。毎章讀み終るごとに、その章の讀みどころがどこにあるかを考えているのだが、なかなかよくわからぬ場合が多い。しかししだいにそれがつかめて來ているという手ごたえはある。表面上は單なる事實の羅列に見えるが、そこに作者の意圖が隠されていることに注意して讀むべきなのである。
- 『曰古』第二十四號(四月十七日)、第二十五號(十月九日)を發行した。第二十四號には、上海博物館藏楚簡の三德、鬼神之明・融師有成氏についての讀書札記、同じく蘭賦の配列についての試案、さらに清華大學藏簡・楚居にかかわる試論を掲載した。第二十五號には學生班員による論文二篇を得て収録した。第二十六號は年度があけて四月十五日刊行の豫定である。
- 四月一七日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第八章(四六)簡より
- 四月二四日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第八章(四八)簡より
- 五月 一日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第九章(五〇)簡より
- 五月 八日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第十章(五四)簡より
- 五月一五日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第十一章(五六)簡より
- 五月二二日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第十一章(五七)簡より
- 五月二九日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第十二章(六一)簡より
- 六月 五日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第十三章(六四)簡より
- 六月一二日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第十四章(六六)簡より
- 六月一九日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第十四章(七〇)簡より
- 六月二六日 「清華大學藏戰國竹簡」繫年第

七月三日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十五章(七七) 簡より	一月二九日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十二章(一一九) 簡より	四月二八日	雲岡石窟第十一洞	發表者 黃 盼
七月一〇日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十五章(八〇) 簡より	二月五日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十二章(一一九) 簡より	五月二六日	同右	
七月一七日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十五章(八二) 簡より	二月二日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十二章(一二二) 簡より	六月九日	同右	
一〇月二日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十六章(八五) 簡より	二月二日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十二章(一二三) 簡より	六月二三日	同右	
一〇月九日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十六章(八八) 簡より	二月一九日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十三章(一二六) 簡より	七月二四日	同右	
一〇月二三日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十七章(九一) 簡より	北朝石窟寺院の研究	班長 岡村秀典	七月二八日	同右	
一〇月三〇日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十八章(九六) 簡より	水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』(全一六卷三二册、一九五〇―一九五六年) 圖版解説の會讀を隔週の研究会で實施し、本年度は第一一洞と第一二洞を検討した。あわせて班員の研究發表として、二〇一六年一月一六日に石松日奈子「山西省平定開河寺石窟の隋開皇元年摩崖半跏大佛について―「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる―」、二月二日に黃盼「中國における最初の佛教造形について」を實施するほか、二月一六日には山西大學歷史文化學院講師の王煒・趙傑兩先生を圍む交流会、三月一五日にはヴュルツブルク大學漢學系上級講師( JSPS 外國人招へい研究者) 外村中「キジル石窟に描かれた大乘の神變佛について」の公開講演會を實施する。また、當研究所と中國社會科學院考古研究所との共同編集により中國の科學出版社から刊行している『雲岡石窟』中英語版のうち第二期分(第八―第十六卷) が出版され、増補の第三期(第一七―二〇卷) は圖版冊の校正まで進んだ。	一〇月二七日	同右		
一月六日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十八章(一〇〇) 簡より	開河寺石窟の隋開皇元年摩崖半跏大佛について―「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる―	石松日奈子	一〇月二三日	雲岡石窟第十二洞	發表者 黃 盼
一月二三日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第十九章(一〇四) 簡より	「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる	同右	一月二九日	山西省平定開河寺石窟の隋開皇元年摩崖半跏大佛について―「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる	
一月二七日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十章(一〇八) 簡より	「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる	同右	二月二日	雲岡石窟第十二洞	發表者 黃 盼
二月四日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十章(一一一) 簡より	「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる	同右	二月二日	中國における最初の佛教造形について	
二月二日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十一章(一一四) 簡より	「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる	同右	二月九日	雲岡石窟第十三洞	發表者 黃 盼
二月一八日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十一章(一一五) 簡より	「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる	同右	二月一六日	北齊韓祖念墓出土銅器研究札記	發表者 WANG WEI
二〇一六年一月二二日	「清華大學藏戰國竹簡」 繫年第二十一章(一一五) 簡より	「鎮國王像雙丈八」銘をめぐる	同右	二月二三日	雲岡石窟第十三洞	發表者 ZHAO JIE
				三月八日	同右	發表者 桑原正明

- 三月一五日 キジル石窟に描かれた大乘の神變佛について 外村 中
- 三月二二日 雲岡石窟第十三洞 桑原正明
- 前近代ユーラシアにおけるフロンティアとトランス・フロンティア 班長 稲葉 穰
- 本研究班は、中央アジア、南アジア、西アジアのフロンティアとしての「歴史的アフガニスタン」において何が起きてきたのか、そこを越えて移動した人やモノはフロンティアを超えた先でいかに機能したのかを、文献資料や出土資料をもとに検討し、「前近代におけるグローバルズム」がいかなる實態を持っていたのか、を明らかにすることを目的として計畫された。本年はアフガニスタンの周辺地域における多様な文化交流に關する研究報告と並んで、九世紀に Abu Dulaf によって執筆されたアラビア語の旅行記であるいわゆる『第一書簡』を、二〇世紀初頭にイランのマッシュハドで発見された貴重な寫本に基づき開始した會議した。
- 四月二四日 Ibn al-Faqih, Kitab al-Buldan 會讀 中西龍也
- 五月 八日 法隆寺・東大寺寶物に見られる「イラン文化」・エフタルとソグドの影響について 影山悦子の前近代インドにみる「越境」の男女關係・接觸が作り出す「境界」 和田郁子
- 六月一二日 『ラージヤタランギニー』のペルシア語譯と『ユースフとズラハール』のペルシア語譯と『ユースフとズラハール』のペルシア語譯について 小倉智史
- 七月一〇日 一六世紀中葉インド・中央アジア・イランの旅・オスマン海軍提督の記録から 今松 泰
- 七月二四日 ふたつの海のスルターン・文献資料と刻銘文資料の接點 井谷鋼造
- 九月二五日 パーミヤーン大佛に關するイスラム資料の記述について 稲葉 穰
- 一〇月二三日 Ibn al-Faqih, Kitab al-Buldan 會讀 宮本亮一
- 十一月三日 タキシラとインダス上流・二〇一五年現地調査の報告 内記 理
- 十一月二七日 コルデイスタンのナクシュエバンディーヤとカーディーリーヤ・ムジャッディディー科研イラン調査報告 川本正知・杉山雅樹
- 十二月一日 Abū Dulaf Misal ihn Mubahlit' Risāla al-awwal 會讀 稲葉 穰
- 二〇一六年一月一五日 Abū Dulaf Misal ihn Mubahlit' Risāla al-awwal 會讀 稲葉 穰
- 二月一九日 中國ムスリムとウスマ 中西龍也
- 三月二五日 『集史』インド史・釋迦牟尼傳をめぐる諸問題 小倉智史
- 毛澤東に關する人文學的研究 班長 石川禎浩
- 研究目的の達成に近づくべく、隔週開催の研究班例會を中心に活動を進めた。班員は三〇数名、毎回の研究班例會の出席者は二〇名程度であった。研究班では、まず報告者が一時間半程度の報告を行ったあと、コメンテーターが三〇分程度の批評を加え、その上で全體討論を實施するという形式を取った。報告用レジュメを事前に班員に配布していることもあり、初年度であるにもかかわらず、活潑な議論が可能となった。また、二名の招聘外國人學者と一名の外國人共同研究員をはじめ、(主として中華人民共和國からの) 複数の外國人研究者・院生が繼續的に参加していることも本研究班の特色であり、彼らとの討論を通じて、毛澤東に關する理解をいっそう深めることができた。
- \* 括弧内はコメンテーター
- 四月一七日 毛澤東研究班を始めるにあたって 發表者 石川禎浩
- 五月 八日 『毛澤東時代』再考 發表者 田中 仁 大阪大 (谷川眞一)
- 五月二三日 林彪派將軍の回想録——吳法憲『歲月艱難 吳法憲回憶錄』を 中心に 發表者 瀬戸 宏 (武上眞理子)
- 六月 五日 青年毛澤東の再檢討——胡適との關係を起點として

- 六月一九日 發表者 森川裕貴(三田剛史)  
毛澤東と男性性
- 七月一〇日 毛誕節快樂! ——毛澤東誕生記念日の研究  
發表者 小野寺史郎(山崎 嶽)
- 一〇月二日 毛澤東政治と陰謀論  
發表者 谷川眞一(江田憲治)
- 一〇月一六日 一九五〇年代中國の經濟學界と毛澤東 發表者 三田剛史(小野寺史郎)
- 一〇月三〇日 毛澤東の農村調査と華南農村社  
會  
發表者 村上 衛(蒲 豊彦)
- 十一月六日 毛澤東の「農村による都市の包圍論」の形成について  
發表者 江田憲治(森川裕貴)
- 十一月二七日 毛澤東イメージの形成—日中戦争期から建國初期における物語の成立と展開  
發表者 丸田孝志(高嶋 航)
- 十二月一八日 中國の現代美術からみる毛澤東圖像の「價値」  
發表者 漆 麟(范 叔如)
- 二〇一六年一月二二日 毛澤東の都市觀—建國初期の北京を例に—  
發表者 島田美和(柴田陽一)

- 二月五日 コミュニテルン由來の「毛澤東傳略」手稿本について  
發表者 石川禎浩(丸田孝志)
- 二月一九日 紅衛兵資料整理の現状に關する報告と展望  
發表者 望月直人・小堀慎悟(谷川眞一)
- 三月四日 毛澤東と新中國の民族工作—新疆における黨政軍の浸透に關する初歩的考察—  
發表者 吉田豐子(田中 仁)
- 三月一八日 毛澤東の歴史觀—その背景と形成過程—  
發表者 山崎 嶽(岩井茂樹)
- 東アジアの宗教文化と自然學 班長 武田時昌  
東アジアの自然學の形成と展開において、宗教文化の果たした役割は大きい。宇宙論や世界觀に關して、古代の蓋天説、渾天説が佛教の唱えた須彌山説、イエズス會士がもたらしたアリストテレス宇宙構造論及びコペルニクスの地動説に發端する近世ヨーロッパの新知識の傳來によつてどのような變容を受けたのかについて具體的な様相を採つた。とりわけ、圓通の『佛國曆象編』を讀解しながら、方以智、梅文鼎等の著作や本木良永、志筑忠雄の地動説、ニュートン物理学に關する翻譯書をめぐる日本近世的な展開を、比較文化的なアプローチから分析的に考察した。また、道教文化との關わりを探索するための基礎作業として、象數易や占術への遡及的な考察を試み、班員による

- 研究發表を行いながら、先秦方術から道教、術數學への史的展開を討議した。六月中旬には國內外の天文學者、科學史家を多數招聘して古今の宇宙論に關するアジア傳統科學國際ワークショップ(數内清博士追悼研究集會二〇一五)を開催し、一二月には形の文化研究會(代表・山口義久大阪府立大學名譽教授)との共催で研究集會を行った。
- 四月一五日 正覺寺の須彌象について  
善兵衛ランドの平天儀について 宮島一彦  
梅林誠爾
- 五月一〇日 阿彌陀寺の須彌象の調査について  
『佛國曆象編』卷之五「論五星測驗起於印度」  
Bill Mak(麥 文彪)
- 五月二四日 九宮について  
清水浩子  
占書『禮緯含文嘉』に見える望氣術と取寶儀禮 佐々木聰
- 六月一四日 正覺寺の調査  
『佛國曆象編』卷之五「論五星測驗起於印度」(續)  
發表者 Bill Mak(麥 文彪)
- 六月一八日 數内清博士追悼 アジア傳統科學國際ワークショップ二〇一五  
公開講演會「時空を超えて交差する宇宙觀—自然科學者と人文學者が語る宇宙觀—」  
司會 武田時昌

六月一八日

宇宙にまつわるマシアの神話・  
傳説と宇宙觀 海部宣男  
宿曜道にみられるインドの天文  
學と占星術 矢野道雄  
藪内清博士追悼 マシア傳統科  
學國際ワークシヨップ二〇一五  
「古今の宇宙觀」An Interdisci-  
plinary Investigation into Over-  
lapping Cosmologies

同會 Bill Mak (麥文彪)  
Beyond Science: Indian-Chinese  
Astronomy in the Popular  
Realm Tansen Sen  
Tallying with Heaven: the Fu-tian  
符天 in the Naturalization of a  
“western” Astral Science in  
China 鎌早輔 1  
Buddhist Cosmology in Bhutan-  
ese Murals: An Iconographic  
Understanding of the Negotia-  
tion between Kalacakra and  
Abhidharmakośa Cosmologies  
Eric Huntington  
A Supernova in the Heian  
Period: the Historical Record  
and Modern Astronomy  
小上勝二 1  
Ancient Solar Activities Rec-  
orded in Literature 早川徳洋

六月一九日

マシア傳統科學國際ワークシヨ  
ップ二〇一五「古今の宇宙觀」  
An Interdisciplinary Investiga-  
tion into Overlapping Cosmologies  
同會 Bill Mak (麥文彪)  
Fengshui Protection: The Four  
Mythical Beasts and Shinto  
Shines Ellen van Goethem  
Representing the Unknown:  
The Eighth-Century Pedestal of  
Yakushiiji's Master of Medicine  
Buddha Cynthia J. Bogel  
Poeticized Cosmologies: Post-  
Modern Realms and Dedicatory  
Prayers in Ancient Japan

Bryan Lowe  
Tortoise Shells as Cross-Cultural  
Compass: Chinese and Tibetan  
Similarities  
Anna-Alexandra Fodde Reguer  
How a Confucian World-View  
Integrated New Knowledge of  
Europe and Southeast Asia  
within a Traditional Framework  
Cindy Postma  
A Sphere Unto Itself: the Death  
and Medieval Framing of the  
History of Chinese Cosmography  
Daniel P. Morgan

七月一九日

Cosmology at the Crossroads:  
the Harvard Traibhumi Manu-  
script Peter Skilling  
『歌川國芳「智多星吳用」と古  
觀象臺の觀測器』について・キ  
トラ古墳天文圖の年代および緯  
度に關する新説について・『佛  
國曆象編』卷之五「論西洋測量  
無所適從」「論日月體量内外諸  
說不同」 宮島一彦  
馬王堆帛書《陰陽五行》甲篇全  
體構造の復原について

八月一日

名和敏光  
渾天壹統星象全圖と渾天儀の調  
査報告 宮島一彦  
『佛國曆象編』卷之五「論言輿  
地廣狹内外典其說大異」

九月一日

小林博行  
『佛國曆象編』卷之五「論周髀  
所言四極節氣之差與佛說契合」  
小林誠爾  
『佛國曆象編』卷之五「論周髀  
所言四極節氣之差與佛說契合」  
(續) 梅林誠爾  
『佛國曆象編』卷之五「論周髀  
所言四極節氣之差與佛說契合」  
(續)「論西法地度不合其實」  
宮島一彦

一〇月一日

一二月三日 『佛國曆象編』卷之五「論世間

一〇月一日

一〇月一日 『佛國曆象編』卷之五「論周髀  
所言四極節氣之差與佛說契合」  
(續) 梅林誠爾

一一月五日

一〇月一日 『佛國曆象編』卷之五「論周髀  
所言四極節氣之差與佛說契合」  
(續)「論西法地度不合其實」  
宮島一彦

一二月三日

一〇月一日 『佛國曆象編』卷之五「論世間

天說正與邪竝不出南方一洲義」  
「舉周髀之正以徵西說不經」

二月十九日 無と有を繋ぐ世界

小林博行

文化の概念と問題點—文化人類學と形の文化研究における視點の違い—

中國近世易圖說新探

金 東鎮

易の起源とその構造—新出土資料による—

大野裕司

言は意を盡くさず—中國の不可知論—

武田時昌

二〇一六年一月七日

『佛國曆象編』卷三「論梵曆大概」

宮島一彦・矢野道雄

一月九日 東京ミーティング二〇一六

『金瓶梅』の葬禮における居住空間と女性

上なつき

尙書大傳初探

伊藤裕水

類書に見る「異界」訪問譚の變遷

伊藤令子

圍碁の極意と魅力

李 章元

二月 四日 『佛國曆象編』卷三「論梵曆大概」(續)

矢野道雄

三月 三日 『佛國曆象編』卷三「論梵曆大概」(續)「探大藏中出梵曆立法不同十二」

矢野道雄

人文學研究部

近代天皇制と社會

班長 高木博志

「天皇」個人や「天皇像」、あるいは單なる政治過程でなく、天皇制を國家や社會とのかかわりて考へる問題意識をもつて、研究会を積み重ねた。

一〇回の研究会では、天皇制をめぐる、陵墓・由緒寺院・タイの王權・美術など多様な問題を扱うとともに、地域社會論や大學設立問題なども議論された。五月一六日には大山古墳周邊と堺市における巡見のち、近代の文化財保護や百舌鳥古墳群をめぐる研究会をおこなった。さらに九月一八—一九日には、伊勢神宮や朝熊山・二見浦への巡見をおこなうとともに、古市の朝吉旅館で伊勢神宮をめぐる研究会を、地元の研究者の参加をえておこなった。一二月一九日には、國際シンポジウム「日清戰爭と東學農民戰爭—その東アジア史的位

置」をもち、東學農民軍に對するジェノサイドの實態、東學農民戰爭研究の到達點などが議論された。このシンポジウムを元に、『人文學報』の特集號をくむ豫定である。また次年度以降、共同研究報告書『近代天皇制と社會』の刊行にむけて動き始めた。

現代／世界とは何か?—人文學の視點から

班長 山室信一・小關隆

本年四月二五日の旗揚げ研究会以降、一九一六年一月一八日までにトータルで一回の研究会を開催した(二〇一六年二月までにさらに二回を豫定している)。時には大會議室の利用が必要になるほどの數の出席者を得、各回の報告・討論も充

實した内容であった。本年度の實施にかかわって特筆すべき點には、「環世界の人文學」班とのジョイント開催(本年七月一八日)があったこと(二〇一六年度二月一五日にも豫定されている)、また十一月二八—二九日に國際カンファレンス「歴史と記憶の政治とその紛争—ユーラシアをめぐる東西の對比と對話の試み」(關西學院大學)を共催したこと、がある。二〇一六年度にもジョイント開催を繼續するとともに、國際シンポジウム(東アジアにおける歴史認識と歴史教育(假))の企畫も進行中である。

環世界の人文學—生きもの・なりわい・わざ

班長 大浦康介

初年度である本年度は、班長(大浦)と副班長(藤原・石井)による本共同研究の趣旨説明のあと、ユクスキユル、木村敏、ヴァイツェッカーらの基本文獻の會讀と、所内外の班員やゲストによる動物論、生業論、科學技術論等にかんする自由發表という形で研究会を催した。なお、このうち數回は「現代／世界」班との合同開催とした。

アジアの通商ネットワークと社會秩序

班長 籠谷直人

本年度は三年間行われてきたB班をC班として一年延長するかたちとなり、實質的に四年目の最終年度にあたる。そのため本年度は、成果報告書作成のための各自の論文執筆期間とした。研究成果は成果報告書として出版豫定でありが、一部は人文學報に投稿豫定である。

三月 六日 成果報告書作成にむけて

近代植民地都市バタヴィアの誕  
生 植村泰夫

蘭領インドにおける技術者教育  
と工学 松田浩子

オランダ東インド會社の貿易と  
バタヴィア—一八世紀前半バタ  
ヴィアのオランダ本國貿易とア  
ジア城内貿易 島田龍登

ジャワにおける臺灣包種茶の普  
及と商人のネットワーク

工藤裕子

一九三〇年代バタヴィアにおけ  
る日本製綿製品の流通と華僑華  
人 泉川 普

バタヴィア建設以前のジャワと  
中國—明代華人の活動を中心に  
山崎 嶺

バタヴィア華人と中國—一七  
一九世紀バタヴィア公館公安簿  
から見た一考察 城山智子

「唐人」の現地適應と戰略（ス  
ケルトン） 岩井茂樹

二〇世紀初頭における客家系華  
僑の臺頭アジア交易ネットワー  
ク—梅縣南口鎮潘家を手掛かり  
に 陳 來幸

一九世紀後半における「英蘭  
型」國際經濟秩序の形成とイー  
スタン・バングの東南アジア展

開

日中戦争・アジア太平洋戦争期朝鮮社會の諸相  
川村朋貴

本年度は七回の研究会、一回の公開セミナーを  
開催した。研究発表、資料紹介、書評など、計一  
八の発表を行ない、質疑應答、情報交換を通じて、  
問題意識、視點、資料解釋などに關して活發に討  
論した。特に公開セミナーでは、韓國から中堅研  
究者二名を招いて、戦時期朝鮮社會の狀況に關す  
る新たな研究狀況や新たな資料について紹介して  
もらい、日韓の歴史研究者の交流と相互討論を  
圖った。これらの研究発表により、戦時期の朝鮮  
社會について、とくに新資料の發掘と分析が大き  
く進展した。

「ブラフマニズムとヒンドウイズム」準備研究  
班長 藤井正人

昨年度は前の共同研究の積み残しに活動の大半  
を費やしたために、本年度（第二年度）が二年間  
の本共同研究の實質的な研究期間となっている。  
來年度、開始豫定の「ブラフマニズムとヒンドウ  
イズム」の本研究への準備として、班員の分野を  
廣げ、ヒンドウー教（タントラ）、ジャイナ教、  
佛教、インド・イスラム史、南アジア人類學の研  
究者を新たに班員に加えた。本年度の初回に、研  
究のねらいについて確認するとともに、班員がそ  
れぞれの専門分野から「ブラフマニズムとヒン  
ドウイズム」準備研究および本研究にどのように  
アプローチするかについて検討した。以降の研究  
會では、初期のヴェーダ文獻に現れる秘儀的な傾

向、南インド・ケララ州のバラモン社會におけ  
るヴェーダとヒンドウー教（タントラ）の現狀分  
析、などの報告を行った。なお、三月に外國から  
研究者を招いて、「ブラフマニズムとヒンドウイ  
ズム」本研究へのキックオフのための國際シンポ  
ジウムを開催した。

ウメサオ・スタディーズの射程 班長 田中雅一

本研究會は以下の三つの活動からなる。(一)  
と(三)は「みやこの學術資源プロジェクト」と  
連携して行っている。(一) 研究発表・梅棹の關  
心や業績は多岐にわたる。これらを整理し、主要  
なテキスト読み、それに基づいて研究会を行う。

(二) 紙媒體資料のデジタル化・具體的には、人  
文科學研究所に残されている社會人類學講座の梅  
棹關係の書類を項目ごとに分類し、デジタル化し、  
整理している。デジタル化された文書のリストを  
作成、詳細な説明をつけた資料も作成中である  
(今年度終了豫定)。(三) テープ資料のデジタル  
化・京大在籍中の梅棹忠夫の活動は多岐にわたる  
が、そのひとつが近衛ロンドという研究会・自主  
講義であった。當時の會合を記録していたオーブ  
ンリールテープを、昨年も引き続き外注してデジ  
タル化している。

「ヴァードウーラ・シユラウターストラー」研究  
班長 井狩彌介、藤井正人

ヴァードウーラ・シユラウターストラーの第八章  
（アグニチャヤナ祭）を研究対象にして、井狩  
（班長）が校訂テキストと譯注を作成し、研究会  
で報告するとともに、参加者全員によって検討を

向、南インド・ケララ州のバラモン社會におけ  
るヴェーダとヒンドウー教（タントラ）の現狀分  
析、などの報告を行った。なお、三月に外國から  
研究者を招いて、「ブラフマニズムとヒンドウイ  
ズム」本研究へのキックオフのための國際シンポ  
ジウムを開催した。

ウメサオ・スタディーズの射程 班長 田中雅一

本研究會は以下の三つの活動からなる。(一)  
と(三)は「みやこの學術資源プロジェクト」と  
連携して行っている。(一) 研究発表・梅棹の關  
心や業績は多岐にわたる。これらを整理し、主要  
なテキスト読み、それに基づいて研究会を行う。

(二) 紙媒體資料のデジタル化・具體的には、人  
文科學研究所に残されている社會人類學講座の梅  
棹關係の書類を項目ごとに分類し、デジタル化し、  
整理している。デジタル化された文書のリストを  
作成、詳細な説明をつけた資料も作成中である  
(今年度終了豫定)。(三) テープ資料のデジタル  
化・京大在籍中の梅棹忠夫の活動は多岐にわたる  
が、そのひとつが近衛ロンドという研究会・自主  
講義であった。當時の會合を記録していたオーブ  
ンリールテープを、昨年も引き続き外注してデジ  
タル化している。

「ヴァードウーラ・シユラウターストラー」研究  
班長 井狩彌介、藤井正人

ヴァードウーラ・シユラウターストラーの第八章  
（アグニチャヤナ祭）を研究対象にして、井狩  
（班長）が校訂テキストと譯注を作成し、研究会  
で報告するとともに、参加者全員によって検討を

行った。初回のヴァードウーラ学派とその現存文献に關する概説を受けて、第二回よりテキストの會讀を中心に、補説的な研究を混ぜながら共同研究を進めた。今年度、検討したテキストの主題は、祭式材料の準備、ティローダー女神とブラフマンのための獻供、ウカー土器のための粘土収集に關する諸祭事などである。補説的な研究としては、豊穰の觀念に關わるプリーシャという難語について報告を行った。

公募型研究班

環境インフラストラクチャー…

自然、テクノロジー、環境變動に關する比較研究

班長 森田敦郎

共同研究プロジェクトの最終年度である本年度は、研究成果の國際発信と總括に重點を置いて研究會を実施してきた。また、本プロジェクトを基盤として今後も持續的に共同研究を実施し、成果を發表していくための基盤形成を行った。具體的には、七月にタイのバンコクで開催された IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) の國際大會にて本プロジェクトの成果の一部をパネル發表し、高い評價を得た。八月七日、ならびに二四日には Nicolas Landin と Penny Harvey を招いてワークショップを開催し、科學技術社會論、人類學、環境論に關する議論を深めるとともに、今後の國際共同研究の實施について意見交換を行った。また八月以降、本プロジェクトの中核概念である「環境インフラストラクチャー」の發展形として、Assemblages of the Future という概念を中心に据え、日本と海外の人類學者と科學技術社會學者をメンバーとする新たな研究プロジェクトを構想し、その助走となる研究會を通して具體的な計畫を進めてきた。この新たなプロジェクトは、環境インフラストラクチャーと密接な關わりをもつテーマ(例えば災害、ケア、開發、氣候變動等)を「未來」という時間性の中で考察しようとするものである。また、本研究班の成果出版のための編集作業と論文執筆を合宿形式で行った(なお、本年度一〇月より班長が海外研修中のため、本年度の研究會は前期に集中的に實施し、後期は主に成果の刊行に向けた執筆・編集作業を行っている)。

「環境インフラストラクチャー」の發展形として、Assemblages of the Future という概念を中心に据え、日本と海外の人類學者と科學技術社會學者をメンバーとする新たな研究プロジェクトを構想し、その助走となる研究會を通して具體的な計畫を進めてきた。この新たなプロジェクトは、環境インフラストラクチャーと密接な關わりをもつテーマ(例えば災害、ケア、開發、氣候變動等)を「未來」という時間性の中で考察しようとするものである。また、本研究班の成果出版のための編集作業と論文執筆を合宿形式で行った(なお、本年度一〇月より班長が海外研修中のため、本年度の研究會は前期に集中的に實施し、後期は主に成果の刊行に向けた執筆・編集作業を行っている)。

古典解釋の東アジア的展開 宗教文獻を中心課題として

班長 藤井淳

今年度は研究班を八回開催した。参加者は毎回二五〜三五名ほどであった。分野は中國および日本の佛教の思想・歴史・考古・美術のほか、道教思想や中國土着思想を扱った。前二年と同様、今年も毎回、一人の報告者と二人のコメンテーターを選定して行われた。参加者は京都市内はもちろん、北は仙臺から、東京、大阪、神戸を中心に、南は熊本市に至る各地の班員が集った。各戒の具體的テーマと内容全體については、「六、研究成果の概要」および「七、本年度の研究實施内容」に記す通りである。最終回の「總括」では、班長自らが三年を振り返り、各内容を整理して幾つかの重要な視點を設定して、反省點と今後の課題も

含めて、研究班の總まとめをした。

\* 括弧内はコメンテーター

四月二八日 夏元鼎『黃帝陰符經講義』の思想と道・佛二教 山田 隆

(横手 裕・松森秀幸)

五月二三日 親鸞の佛教理解 末木文美士

(熊谷誠慈・藤井 淳)

六月二〇日 近代における東アジアの「宗教」概念 藤井 淳

(村田みお・中西龍也)

七月一八日 東アジアにおける本生圖 田中健一

(向井佑介・加納和雄)

九月二二日 二つの布袋像…その傳記を中心にして 陳 繼東

(金 文京・宮崎展昌)

一〇月一〇日 北魏平城期の雲岡石窟 岡村秀典

(齋藤 明・藤井 淳)

一二月二日 南宋制作「涅槃(變相)圖」とその儀禮の復元的考察 西谷 功

(齋藤智寛・岡田英作)

二〇一六年二月二〇日 研究班の總括 藤井 淳

人文學研究資料にとつての Web の可能性を再探する 班長 永崎研宣

本年度は、八回の研究會を開催するとともに、本研究所にて主催した JADH2015 國際シンポジ

ウムの開催に協力した。研究会では、これまでに引き続き、人文學におけるWebの活用に関わる技術面・運用面について、公開しにくい内容も前提とした上で議論を行ない、班員全體として、Web活用に関わる知見を深めた。さらに成果公開に向けて、ガイドラインとしての書籍を刊行すべく出版社と交渉するとともに、原稿執筆に共同で取り組み、そのなかで班員同士での認識のすりあわせを行った。とりわけ、文字コードの記述に関する議論に時間をかけ、班全體としての認識を高めるとともに、想定讀者、すなわち、本研究班が課題とするテーマに取り組む層の想定と、その層に對する記述の適切さといった観點からの検討を行った。

五月十五日 海外の動向とミュージアム情報のWeb展開

ミュージアムでのドキュメンテーションに係るメタデータについて 北岡タマ子  
西洋史におけるWebの活用：二つの視點から 菊池信彦  
人文系Webの要件をいかにして廣めるか 永崎研宣

六月十二日 Web上の漢籍の可能性  
漢籍リポジトリとマインドクの設定背景 Christian Witem  
人文系Webの要件の可能性 永崎研宣  
七月一七日 米國における人文學Web情報

とデジタル・ヒューマニティーズ教育  
米國での英文學DPO教育

横山説子  
人文系Webの要件と可能性

永崎研宣  
八月二日 コーパスとWeb

歴史コーパスについて  
小末會智信

人文系Webの要件について  
永崎研宣

十二月二五日 人文系オープンデータとWeb  
國文研によるオープンデータの検討 永崎研宣・松田訓典

Web上で展開される人文學の現状 永崎研宣

二〇一六年二月二十日 構造化テキストの共同編集  
共同通信 NewsMLの開発とXML規格の展望 竹村貴弘

人文學とWebに関する共同研究班の成果取りまとめ 永崎研宣

二月二四日 人文學における文字コードとWeb  
人文學における文字コードとWeb 永崎研宣

三月二四日 人文學における文字コードとWeb  
人文學における文字コードとWeb

人文學における文字コードとWeb 永崎研宣

東アジア傳統醫療文化の多角的考察 班長 大形 徹

東アジア傳統醫療の全體像とその文化的特色を構造的に把握するために、醫者、鍼灸師、藥劑師、醫學史研究者に加えて諸領域の人文學研究者を結集して研究集會を開催し、『醫心方』の會讀と特別講演、研究發表を行った。昨年度末から取り組んでいる課題として、『醫心方』『醫方類聚』『傷寒論』を中心に古醫書研究のあり方を議論し、それらの世界記憶遺産登録等の必要性を協議するとともに、現代醫療にどのような提言が發信できるかについて検討を加えた。ゲストスピーカーには、北京中醫藥大學の梁燦教授、上海中醫藥大學の張如青教授をはじめとする著名な醫學史家を招聘した。年明けには、北里大學東洋醫學總合研究所醫學研究部、兵庫醫科大學中醫藥孔子學院と共催で國際ワークショップを企画し、醫學史研究の泰斗である黃龍祥、小會戸洋、眞柳誠三氏を含む公開講演會を行い、百名を超える聽衆を集めた。また、三月には、國文學研究資料館主導共同研究プロジェクト（研究代表・陳捷教授）と合同で國際ワークショップを企画し、富士川文庫を中心とする古醫書を調査し、附屬圖書館が推進しようとしているデータベース化事業の諸問題を討議し、さらに臺灣、韓國の研究者を招いて東アジア科學史の特別講演會を開催した。

\* 括弧内はコメンテーター

六月 七日 『胎産書』「十問」などの譯注を

通して見えてきたもの 大形徹  
『醫心方』に魅せられて

榎佐知子

七月 五日 臨床醫に生きた曲直瀬玄朔とそ

の周邊 葉山美知子

漢方薬の症例呈示、および雲海

士流について 松岡尙則

舌診の歴史について 梁 嶸

一〇月一〇日 『醫心方』訓讀作成プロジェクト

トに向けて (一)

伊藤裕水・島山奈緒子

知徳から行徳へ

發表者 遠藤次郎

東京理科大学薬学部・名誉教授

一月 三日 『醫心方』訓讀作成プロジェクト

トに向けて (二)

伊藤裕水・島山奈緒子

『諸病源候論』の風病に關する

『醫心方』への影響を巡って

越智秀一

出土醫學文獻整理研究の回顧、

現状と展望 張 如青

二〇一六年一月九日

傳統醫療文化國際ワークショップ

「鍼灸道 未來への軌跡」

『醫心方』卷六選讀

島山奈緒子

古訓で讀む『醫心方』

伊藤裕水

司會 大形 徹

開會挨拶 新家莊平

漢方研究六〇年

發表者 小曾戸洋

古典針灸學の世界―求真と求解

發表者 黃 龍祥(猪飼祥夫)

學術史研究における日本漢學と

醫學史 町泉壽郎

傳統醫療の未來を拓く

眞柳 誠

二月 七日 四川成都老官山の醫學書概觀

猪飼祥夫

和漢診療學・あたらしい知の創

造 寺澤捷年

三月 五日 東アジア傳統醫療文化ワーク

ショップ(一日目)

司會 陳 捷

富士川文庫のデータベース化

赤澤久彌

京大富士川文庫探訪記

長野 仁

古醫書データベース化構想の諸

問題 武田時昌

三月 六日 「東アジアの技術的傳統への再

照射」國際ワークショップ(二

日目) 東アジア科學技術史國

際シンポジウム

古訓で讀む『醫心方』(三) 卷

八 脚氣形狀第二

伊藤裕水(石井行雄)

中國按摩推拿醫學の週及的考察

大形 徹・李 强

文本的射影・文抄與西方曆算學

的傳播 祝 平一(宮島一彦)

東アジアにおける許浚『東醫寶

鑑』の流布について

發表者 朴 現圭(吉田和裕)

朝鮮醫學史研究の概觀と近年の

動向 任 正嫻(安 相佑)

總合討論「傳統科技典籍の近世

的傳播」 司會 武田時昌

日本宗教史像の再構築 班長 大谷榮一

本年度はモグニティ／モグニゼーションと日本

宗教史の關わりを中心に研究會を開催した。複製

技術、マスメディア、國民國家、世俗化などを

テーマとしたワークショップを企画し、一二月に

はヨガやレイキといった身體修養技法が宗派や國

境を越境し、不斷に再創造される現象について國

際シンポを開催した。このほか、人文研アカデ

ミー「日本宗教史再入門」や「人文學報」の特集

號(一〇八號)などにより研究成果を公開した。

チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の學際的研究

班長 岩尾一史

本年度は合計で八回の研究會を行うことができ

た。班員それぞれの研究關心に沿った研究報告を

依頼し、歴史學、文化人類學、言語學の各分野か

ら、古代〜現在にいたるまでのチベット文化の諸

相について最先端の研究報告を聞くことができた。本年度の特徴として報告者の半数が關西以外の研究者によるものであり、國內における研究者の交流を促進することにも成功したといえる。また議論の時間を出来るだけ多く取ったことにより、異分野からの情報提供・意見交換をより活発に行うことにも成功した。各回の具體的な内容は以下の實施内容を参照されたい。

また、本研究班の成果報告をどのように公開し出版すべきかについて、研究會上において打ち合わせを複数回行った。また一月二日の研究会開催時には、実際に某出版社の編集者も打ち合わせに参加し、より具體的な形で出版打ち合わせを行うことができた。

四月一八日 クンイク寫本解凍清書時に發生する異讀の可能性 小野田俊藏  
五月二三日 チベット帝國と青海東部 岩尾一史

六月二〇日 チベット舊社會における村落形態の諸類型 大川謙作

七月一八日 文獻に刻まれるチベット語の歴史變化の足跡 星 泉

九月一八日 チベット文明形成期の特徴―他文明とくに西アジアとの關係 武内紹人

一〇月一〇日 「作る／バクル」とコピー・ライター・チベタン・ポップから考えるチベット難民社會の所有感 覺の動態 山本達也

一一月二二日 Neo-Tibetanization: ポスト王政期ネパールにおける、佛教の政治とヒマラヤ佛教徒 別所裕介

一二月一九日 寺本婉雅の再評價―新出資料から 三宅伸一郎  
二〇一六年三月一八日 研究打合せ

三月一九日 モンゴル時代のチベットにおける在地氏族と官稱號 山本明志

古い文書の中の神格―その効果と意義について 西田 愛

チベット領有のエスノグラフィ―土地と神靈をめぐる村落社會の實踐と語り 別所裕介  
ボン教における「僧侶」の諸相―生業、戒律、儀禮をめぐる 小西賢吾

## 個人研究

### 東方學研究部

清代の文化と社會 井波 陵一  
中國古代中世の法制 富谷 至  
中國科學的思想史的考察 武田 時昌  
近代中國の財政と社會 岩井 茂樹  
先秦時代の金文 淺原 達郎  
古代中國の考古學研究 岡村 秀典  
イスラーム東漸史の研究 稻葉 穰

インド・中國における佛教の學術と實踐 船山 徹

佛教研究知識ベース―禪佛教を例として WITTERN, Christian

川西走廊の漢藏諸語の記述言語學的研究 池田 巧

中國共產黨史の研究 石川 禎浩  
文字コード理論 安岡 孝一

秦漢時代の制度史 宮宅 潔  
高麗官僚制度研究 矢木 毅

中國注釋學史研究 古勝 隆一  
華南沿海の社會經濟制度の變容 村上 衛

東アジア佛教美術史の研究 稲本 泰生  
中國中世近世の文學理論 永田 知之

文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究 守岡 知彦  
中國古代中世の官制史 藤井 律之  
モンゴル時代の文化政策と出版活動 宮 紀子

明代後期北虜南倭時代の中國社會 山崎 嶽  
中國家具とその使用に關する研究 高井たかね

中國北魏時代の佛教石窟寺院 安藤 房枝  
中國古代における領域支配の研究 土口 史記

秦漢期國家儀禮の研究 目黒 杏子  
中華民國時期における知識人と政治 森川 裕貴

宋金元代中國の政治・文化・地域 小林 隆道

### 人文學研究部

近代朝鮮の政治と社会 水野 直樹  
近代東アジアにおける日本の法と政治 山室 信一

在日米軍を中心とする軍事共同體の人類學的研 田中 雅一  
究 大浦 康介

文學理論の研究 藤井 正人  
ヴェーダ文獻の生成と傳承の研究 竹澤 泰子  
人種・エスニシティ論 籠谷 直人

戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク 高木 博志  
近代天皇制の文化史的研究 岡田 暁生  
音楽におけるロマン派とメロドラマ的音楽 高階繪里加

近代日本の藝術と西洋 小關 隆  
一九世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァ  
ティズム 近世ヨーロッパの歴史敘述と政治思想 王寺 賢太

幕末期の畿内・近國社会 岩城 卓二  
精神分析的知を思想的に位置づける試み 立木 康介

ザガフカスの「義賊」と戦争 伊藤 順二  
南インドにおけるブータ祭祀に關する人類學的 石井 美保  
研究 東アジアにおける生命科學と「自然」 瀬戸口明久

農業史の再構築 藤原 辰史  
鳥崎藤村その他の近代文學者の作品研究——リ 海部 宣男  
アリズム、メディア、帝國 HOLCA, Irina

近代日本民俗誌システムの研究 菊地 暁  
近代西洋醫學發展史研究および身體論 田中祐理子

再構築されるオリシヤ崇拜——異なる「人種・ 小池 郁子  
宗教」をとりこむアフリカ系アメリカ人の社会 運動 藤井 俊之

啓蒙と文學——アドルフ・美学における「人間 小川佐和子  
性」の位置づけ 比較映畫史研究 小野 容照

近代朝鮮の民族運動と東アジア 近世ヨーロッパの歴史敘述と政治思想 王寺 賢太

### 事業概況

(東方學研究部関連事業)

・敷内清博士追悼天文曆法國際ワークショップ  
六月一七日—一九日 (本館四階大會議室、分館東アジア  
人文情報學研究センター大會議室)

・アジア傳統科學國際ワークショップ2015 古  
今の宇宙觀 (分館東アジア人文情報學研究セン  
ター大會議室)

・アジア傳統科學國際ワークショップ2015公  
開講演會 六月一八日 (分館東アジア人文情報學研究セン  
ター大會議室)

・時空を超えて交差する宇宙觀——自然科學者と人  
文學者が語る宇宙觀 (オックスフォード大學ボドリアン圖書館)  
・宇宙にまつわるアジアの神話・傳説と宇宙觀 (初級)

・夏期公開講座(人文研アカデミー)  
七月四日(本館一階共通一講義室)  
名作再讀  
・『アン・のゆりかご』を讀む——村岡花子と植  
民地朝鮮—— 小野 容照  
・『官場現形記』を讀む——清末中國「腐敗」官  
僚の世界—— 村上 衛  
・石橋湛山を讀む——自由主義と現實主義の眞  
面目を尋ねて—— 山室 信一  
・高校生のための夏期セミナー  
八月七日(分館東アジア人文情報學研究セン  
ター大會議室)  
漢字文化への誘い——第三回「時には、書物にか  
んして語ろう」  
・讀む・書く・寫す・印刷する——漢字ばかり  
の本ができるまで 永田 知之  
・公開講演會  
九月一日(本館共通一講義室)  
日本デジタル・ヒューマニティーズ學會2015  
(JADH2015)講演  
デジタルアーカイブと圖書館——シェイクスピア  
資料のデジタル化を通じて  
・『オックスフォード大學ボドリアン圖書館』  
・東アジア人文情報學研究センター講演會  
二〇一五年度漢籍擔當職員講習會(初級)

- ・ 第一日(九月二十八日)  
オリエンテーション 富谷 至  
漢籍について(四部分類概説を含む) 永田 知之  
カードの取り方——漢籍整理の實踐 土口 史記
- ・ 第二日(九月二十九日)  
工具書について 高井たかね  
漢籍関連サイトの利用(京都大學附屬圖書館情報サービス課相互利用掛) 大西 賢人  
實習を始めるにあたって 梶浦 晉  
漢籍目録カード作成實習
- ・ 第三日(九月三十日)  
目録検索とデータベース検索 安岡 孝一  
漢籍データ入力實習(一)
- ・ 第四日(一〇月一日)  
和刻本について  
(京都大學文學研究科教授) 宇佐美文理  
漢籍データ入力實習(二)
- ・ 第五日(一〇月二日)  
朝鮮本について 矢木 毅  
實習解説 土口 史記  
情報交換 WITTERN, Christian  
二〇一五年度漢籍擔當職員講習會(中級)
- ・ 第一日(一一月九日)  
オリエンテーション 富谷 至  
経部について 古勝 隆一  
叢書部について 藤井 律之  
叢書と漢籍データベース 安岡 孝一
- ・ 第二日(一一月一〇日)  
史部について 宮宅 潔  
漢籍データ入力實習(一)  
・ 第三日(一一月一二日)  
子部について 古勝 隆一  
漢籍データ入力實習(二)  
・ 第四日(一一月一二日)  
集部について  
(京都大學人間・環境學研究科教授) 道坂 昭廣  
漢籍データ入力實習(三)  
・ 第五日(一一月一三日)  
漢籍と情報處理 WITTERN, Christian  
實習解説 土口 史記  
情報交換 WITTERN, Christian
- ・ 連続セミナー(人文研アカデミー)  
一〇月(本館一階セミナー室一他)  
チベット學の現在…言語・歴史・文化・社會  
・ 一〇月一日 藏羌彝民族走廊の諸言語 池田 巧  
・ 一〇月八日 チベット文明の始まりと建國の神話 岩尾 一史(神戸市外國語大學非常勤講師)  
・ 一〇月一五日 占いからみたチベット文化の底流 西田 愛(神戸市外國語大學非常勤講師)  
・ 一〇月二二日 いまを生きるボン教徒——東チベットのフィールドから 小西 賢吾(金澤星稜大學專任講師)
- ・ 京都レクチャー2015  
一〇月一六日(本館一階セミナー室一)  
Cosmogonic Myths in the Tibetan Bon Magic Ritual of the Blazing Water (dhal chu) Giacomella Orofino (ナポリ東洋大學)  
・ 京都レクチャー2015  
一二月一八日(本館一階セミナー室一)  
Going on Pilgrimage in 19th Century China: The Itinerary network in the *Canzue zhiyin* 參學知津 Marcus Bingenheimer (テンブル大學)  
・ 國際研究集會  
一月二三日(本館一階セミナー室一)  
近世後期における水戸藩の儒教儀禮——『喪祭儀略』と『喪祭式』を中心に 田 世民  
・ 國際ワークショップ  
二月一三日(本館三階セミナー室四)  
東アジアにおける敘述と歴史  
・ Narrative Rupture in Matayoshi Eiki's Ginemu Yashiki Davinder Bhowmik (ワシントン大學准教授)  
・ 『贈輿』と『文』: 柄谷の「帝國」論を中國思想から讀む 林 少楊(東京大學准教授)  
・ 歴史敘述と記憶: 傳記からみる連鎖と反轉の東アジア パネルディスカッション—語りの交換・重層・傳播 山室 信一・陳 力衛(成城大學教授)
- ・ 第十一回 TOKYO 漢籍 SEMINAR  
三月一四日(一橋大學一橋講堂中會議場)

目録學に親しむ(司會 WITTERN, Christian)

・漢籍目録を讀む——俯瞰の樂しみ

古勝 隆一

・子部書の分類について

宇佐美文理(京都大學文學研究科教授)

・目録學の總決算——『四庫全書』をめぐる

永田 知之

## 所員動靜

・井波陵一教授(附屬東アジア人文情報學研究センター)を當研究所長に併任(四月一日～二〇一七年三月三十一日)

・富谷至教授(東方學研究部)を附屬東アジア人文情報學研究センター長に併任(四月一日～二〇一六年三月三十一日)

・石川禎浩教授(現代中國研究センター)を附屬現代中國研究センター長に併任(四月一日～二〇一七年三月三十一日)

・小關隆准教授(人文學研究部)は、當研究所(人文學研究部)教授に昇任(四月一日付)

・矢木毅准教授(東方學研究部)は、當研究所(東方學研究部)教授に昇任(四月一日付)

・安岡孝一准教授(附屬東アジア人文情報學研究センター)は、當研究所(附屬東アジア人文情報學研究センター)教授に昇任(四月一日付)

・井狩彌介は、客員教授(文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一六年三月三十一日)

・JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス

國立極東學院京都支部長は、客員准教授(文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一六年三月三十一日)

・武上眞理子 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授(附屬現代中國研究センター、四月一日～二〇一六年三月三十一日)

・藤本幸夫は、特任教授(文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一六年三月三十一日)

・VITA, Silvio 京都外國語大學教授は、特任教授(四月一日～二〇一六年三月三十一日)

・小林隆道は、特定助教(附屬東アジア人文情報學研究センター)に採用(四月一日付)

・目黒杏子は、特定助教(附屬東アジア人文情報學研究センター)に採用(四月一日付)

・森川裕貫は、特定助教(附屬現代中國研究センター)に採用(四月一日付)

・岩井茂樹教授(國際高等教育院)を當研究所(東方學研究部)に併任(五月一日付)

・山崎嶽助教(東方學研究部)は、辭任の上(二〇一六年三月三十一日付)、奈良大學文學部准教授に就任

・小林隆道特定助教(附屬東アジア人文情報學研究センター)は、辭任の上(二〇一六年三月三十一日付)、神戸女學院大學文學部總合文化學科専任講師に就任

・安藤房枝助教(東方學研究部)は、任期満了により退職(二〇一六年三月三十一日付)

・水野直樹教授(人文學研究部)は、定年により

退職(二〇一六年三月三十一日付)

## 招へい研究員

・徐 靜波 復旦大學日本研究センター教授、副センター長  
近代日本知識人の中國認識(一九二〇—一九四五)

(文化連關研究部門) 受入教員 山室教授  
期間 四月一日～八月三十一日

・Jensen, Casper Bruun  
Honorary Fellow, School of Management, Science and Technology Studies, University of Leicester

自然を社會化する——環境問題に對するインフラストラクチャーの對應  
(文化生成研究部門)

受入教員 石井准教授  
期間 七月五日～二〇一六年一月五日

・田 世民 淡江大學日本語文學系助理教授  
東アジアから考える日中文化交流  
(文化連關研究部門)

受入教員 岩城准教授  
期間 八月一日～二〇一六年二月一日

・安 相佑 韓國韓醫學研究院 責任研究員  
日本殘存韓醫學資料の研究  
(文化生成研究部門)

受入教員 武田教授  
期間 二〇一六年一月二〇日～二〇一六年四月

一九日

。董嶺 南京大學文學院副教授  
域外漢籍及び十六國・北朝思想史と學術史の研究

(文化連關研究部門)

期間 二〇一六年三月七日～二〇一六年六月六日  
受入教員 永田准教授

招へい外國人學者

。茅海建 University of Macau 教授

戊戌變法と明治日本

期間 七月一五日～八月一四日  
受入教員 石川教授

。方旭東 華東師範大學教授

東アジア近世思想史研究

期間 九月一日～二〇一六年八月三日  
受入教員 古勝准教授

。李虹 中南民族大學副教授

日中哲學交流史

期間 九月七日～二〇一六年九月七日  
受入教員 石川教授

。蕭紅顏 南京大學建築與城市規劃學院副教授

『墨子』にみえる先秦時代の建築理念

期間 九月一五日～二〇一六年九月七日  
受入教員 岡村教授

。鄭威 武漢大學歷史學院博士課程

出土文獻から見た戰國秦漢郡縣制の研究

受入教員 宮宅准教授

期間 九月一六日～二〇一六年九月一五日

。祝平一 中央研究院歷史語言研究所研究員  
明・清醫者の家訓

期間 十一月一日～十一月三〇日  
受入教員 瀬戸口准教授

。Rupert COX マンチェスター大學人文學部上級講師

A Comparative Study of Coral Reefs in Okinawa and Guam as Militarized Environments.

期間 十一月四日～二〇一六年一月二七日  
受入教員 田中教授

。SOTOMURA Ataru University of Wuerzburg, Senior Lecturer

いわゆる宇宙佛のアイデンティティ

期間 二〇一六年二月二九日～二〇一六年四月一日  
受入教員 岡村教授

外國人共同研究者

。Scherrmann, Sylke Ulrike

青島舊藏ドイツ語文獻中の法制關係資料の調査

期間 二〇一二年四月一日～二〇一六年三月三十一日(繼續)  
受入教員 岩井教授

。尹寧實 University of Tront East Asian Studies Department Postdoctoral researcher

戰時期植民地朝鮮における内鮮一體論と民族超克論：崔南善を中心にして

受入教員 水野教授

期間 二〇一四年八月一日～二〇一六年二月二九日(繼續)

。TAJAN, Nicolas Pierre  
トラウマと文明——「傷」の歴史からみた人類

期間 四月一日～二〇一七年三月三十一日  
受入教員 立木准教授

。Smith, Craig Anthony University of British Columbia, Lecturer

中國におけるアジア主義の受容と展開

期間 八月二七日～二〇一六年一月三十一日  
受入教員 石川教授

。張西艷 北京外國語大學博士後期課程

日本における山海經についての考察

期間 一〇月一四日～二〇一六年四月一四日  
受入教員 富谷教授

。趙恩成 Columbia University

北朝鮮のピナロン開發と李升基に關する研究

期間 九月二二日～一〇月二五日  
受入教員 水野教授

受託研究員

。REDDY, Sreedevi CMR 教育機關、CMR 大學非常勤准教授

近代・平和主義・戰爭協力…長谷川時雨を中心

期間 九月一日～二〇一六年八月三十一日  
受入教員 田中教授

外國人研究生

。RUSCH, Markus

親鸞論—救済論と生—に關する研究

受入教員 大浦教授

期間 四月一日～二〇一七年三月三十一日

。YONG Tsun Nyen

佛敎知識論の形成と東アジアの展開

受入教員 船山教授

期間 六月一日～二〇一六年三月三十一日

。BUCKLEW, Kevin Delaney

唐・宋・元代中國の禪佛敎における通世者

受入教員 船山教授

期間 七月一日～二〇一六年六月三〇日

。金 善美

一〇～一四世紀東アジアにおける禮儀制度の比較研究

受入教員 矢木教授

期間 九月一日～二〇一六年二月二十九日

。陳 俊華

小を以て大を觀る—日本の早期佛敎彫刻におけるミニチュア像の效能

受入教員 稻本准教授

期間 九月一日～二〇一六年五月三十一日

。HOEISAEFER, Tomas Larsen

古代佛敎史

受入教員 稻葉教授

期間 一〇月一日～二〇一七年三月三十一日

。楊 長玉

唐の西部境界について

受入教員 宮宅准教授

期間 一月二日～二〇一六年二月二十九日

## 出版物

### 紀要

・東方學報 九〇冊(紀要第一七八冊)

二〇一五年二月二〇日刊

・東洋學文獻類目二〇一三年度

二〇一六年二月一〇日刊

・人文學報 第一〇六號(紀要第一七六冊)

二〇一五年四月三〇日刊

・人文學報 第一〇七號(紀要第一七七冊)

二〇一五年九月三〇日刊

・人文學報 第一〇八號(紀要第一七九冊)

二〇一五年二月三〇日刊

・ZINBUN number 46

二〇一六年三月刊

### 研究報告その他

・所報人文 第六二號

二〇一五年六月三〇日刊

・現代中國文化の深層構造 石川禎浩編

二〇一五年六月三〇日刊

・京大人文研セミナー〈五〉『清玩—文人のまなざし』

二〇一五年二月刊

・現代思想と政治—資本主義・精神分析・哲學

市田良彦・王寺賢太編

二〇一六年一月一九日刊

・東方學資料叢刊 第二一冊 京大人文研藏書印

譜(二) 矢木毅編

二〇一六年一月二〇日刊

・映畫の胎動—一九一〇年代の比較映畫史 小

川佐和子編

二〇一六年二月二〇日刊

・漢唐法制史研究 富谷至編

二〇一六年二月二十九日刊

・帝國日本と地政學—アジア・太平洋戰爭期に

おける地理學者の思想と實踐 柴田陽一編

二〇一六年三月七日刊

・シナチベット系諸言語の文法現象—名詞句

の構造 池田巧編

二〇一六年三月一五日刊

・センター研究年報二〇一五 ウィッテルン・ク

リステイアン編

二〇一六年三月一八日刊行

・第一次世界大戰を考ふる 藤原辰史編

二〇一六年三月三十一日刊